

自分らしく生きるための一歩

「家庭科で生き方を学び、考える」

家族のあり方が日に日に変化している昨今の日本において、家族や家庭、自分らしく生きることに学び、考えることは、実は小中高等学校の教育のなかにありました。わたしたちが生きていく上で欠かせないことが学べる「家庭科」について、歴史や内容をふりかえりながら、家族であることの意味、家庭があることの意味について改めて考えてみましょう。

ト面とハード面の両方から考えられ、共修実現に向けて対応を講じました。

家庭科は人生を選択するための能力や知識を学ぶ科目

家庭科というと、裁縫や料理の実習をイメージする方が多いと思いますが、ただ技術を習得するための科目ではありません。

家庭科は、人が生まれてから死ぬまでの課題(生き方)について考えるときに、選択するための能力や知識を学ぶ科目です。人生の選択に正解はありませんが、ちよつとでも後悔しないよう、最低限の知識を小中高等学校の教育を通して学びます。

家庭科の教科書をみると、例えば結婚に関するページの写真で外国人との国際結婚を連想させるような写真を掲載していたり、男性が家事をする写真を掲載していたりします。目に見えるものからイメージさせることで、先入観を与えないように工夫された教科書づくりになっています。これは、他の科目とは違って、家庭科が生き方を考える科目だからこそ気をつけている部分なのだと思います。個性を尊重し、自分らしさを活かせる社会の構成員であること。それを教えるのが、家庭科です。

3段階で学ぶ家庭科

家庭科の内容は、成長段階に合わせて自分と関わる範囲が変わります。小学校では、まず自分ひとりでできるように、自己の自立が求められます。中学校では、家族の一員としての役割を果たすことが期待され、さらにこれからの家族や地域での生活をつくっていく立場になります。高等学校では、社会の一員としての自立が求められ、世の中を支える構成員であるということとを自覚します。

家庭科は、働き方や生き方が急激に変化する時代に柔軟に対応できる科目でもあります。自分らしく生きることは、最近特に注目されていますが、どのような選択をするかがその後の人生を変えるのです。家庭科は、学生の時に学んでもあまり具体的に自分ごととして考えられなかったりするかもしれませんが。人生の岐路に立たされたとき、また自立して生活を始めたとき、初めてその必要性に気付きます。20年、30年後まで見据えて、必要とされる比重を考えて子どもたちに教えていく必要があります。

(取材・鈴木)



この方々にお話を伺いました

林 孝子さん(左)
東北女子大学非常勤講師
前青森県立北斗高等学校教頭

木村 紀子さん(右)
青森県総合学校教育センター
産業教育課 指導主事

家庭科が男女ともに学ばれるまで

高校の家庭科男女共修は、1994年からスタートしました。この背景には、『男は仕事、女は家庭』という性別役割分担意識による、男女の役割分担の固定化はおかしい「女子のみが家庭科を必修し、男子は学べないのはおかしい」などの声が上がリ、男女共修が強く求められるようになったことをきっかけとしています。

1985年に女子差別撤廃条約が批准されたことで、学校教育の場においても男女差なく同様の教育が受けられるように、1989年の新学習指導要領に盛り込まれ、1994年から実施されたことで、小学5年生から高校まで、家庭科は男女がともに学ぶ必修の科目となりました。

共修に至るまで、青森県では家庭科共修の研究会が立ち上がり、男子学生に対してどのような指導や教え方が良いのか、ソフ



林先生が実際の授業で使った

家庭科で学ぶ「男女共同参画」

●クイズ「船長はだれ？」

太平洋上で船の衝突事故がありました。船長以下乗組員は全滅でした。ニュースを見た船長の娘Aさんはショックを受けました。なぜなら、昨夜一緒に家族3人で食事をして見送ったばかりだからです。

数日後、ある人から「お気の毒に、これからはお母さんと二人で力を合わせてがんばって」と言われました。

Aさんは「え？」と不思議そうな顔をしました。



問. なぜAさんは不思議そうな顔をしたのでしょか。

このクイズでは、「船長は男性である」という先入観や思い込みを発見することで、自分自身のなかにある男女についての固定観念的な思い込みに気付くことを意図しています。

●ジェンダーとは

「女らしさ、男らしさ」といった社会的・文化的・歴史的側面からみた性差のことです。これに対し、生物学的な性差をセックス(sex)といいます。ジェンダーは社会が求める「らしさ」の教育やしつけによって後天的に形成されます。

●らしさにこだわっていませんか？

今まで、「女だから損した」「男だから損した」という経験はありませんか。わたしたちは気づかぬうちにジェンダーによって生き方や性格、行動を決めつけられていることが多いです。性別によって決めつけずに、「自分らしさ」をお互いに認め合っていける社会をめざしましょう。

■青森県発行 冊子のご紹介■

高校生対象

みんなが自分らしく!!

考えてみよう
学校生活での男女共同参画



このパンフレットは、学校生活にありがちな性別による固定的な役割分担の意識についての「気づき」を得ることを目的につくられ、青森県内の高校1年生を対象に作成されました。高等学校での男女共同参画についての理解促進のため、家庭科の授業等で活用されています。

発行 青森県環境生活部 青少年・男女共同参画課

●冊子に関するお問い合わせ先

TEL: 017-734-9228

<http://www.pref.aomori.lg.jp/life/danjo>



教科書から学ぶ

「家族」「家庭」の意味

家族(family)は、生活のよりどころであり、心のよりどころ。多くの人は、何人かの人たちといっしょに暮らし、居心地のよい家庭生活を求め、自分と家族の幸せを望んでいる。

家庭(home)は、家族が日常生活する場、またはそこでの暮らしの営みのこと。一人暮らしで同居の家族員がいない場合でも、家庭はあるといえる。



教科書から学ぶ

「労働」の必要性

職業労働は、個人や家族の経済生活に必要な収入を得るための働きであり、有償労働である。しかし、職業によって得た収入で食品などを買うだけでは暮らしは成り立たない。人が暮らしていくには、住宅や衣服が必要なほかに、調理やあとかたづけ・掃除・洗濯などの家事労働が必要となる。家事労働は無償労働であるが、家事や育児・高齢者の介護など、私たちの暮らしに必要な不可欠な労働である。

今後は、男女が可能な限り家事労働をともに担い、支え合う社会が求められている。

第一学習社「高等学校 家庭総合新版」より抜粋

気になるデータ

妻の家事・育児参画時間の合計 **6時間3分**

夫の家事・育児参画時間の合計 **39分**

(青森県)

6歳未満の子どもがいる

夫及び妻の家事・育児への参画時間(平成23年)

区分	家事時間	育児時間	合計
青森県	夫 9分	30分	39分
	妻 3時間37分	2時間26分	6時間3分
全国	夫 12分	39分	51分
	妻 3時間35分	3時間22分	6時間57分

資料/総務省「平成23年社会生活基本調査」より作成。
表中の数値は週全体平均・1日あたりの従事時間を示している。

家庭を運営していく家族の構成員として、妻と夫でこれほど参画する時間に違いが出るのには、やはり「男らしさ」や「女らしさ」にこだわったジェンダーの意識が根底にあると考えられます。青森県は子育てをしながら働く女性の割合が多い県です。「女性だから」仕事のほかに家事・育児をするのが当たり前ではありません。家族で協力し合って家事や育児を前向きにとらえ、人間として生きていくために必要なこととして楽しんで生活を営むことが大切です。

こんなことありませんか？

「家庭科共修」ビフォーアフター

職場で
困惑

40代…

男性のお客様へのお茶出しは
女性のほうがいいわね。

共修世代20代…

え、どうして??
お茶出しは、男女どちらでも
いいのでは？

共修世代30代…

今日は妻が留守だから、
息子と二人で晩ごはん。
何をつくろうかな。

50代…

そんなに奥さんに家事を
やらされているの？
困った奥さんね。なんとなく
違和感

共修世代20代…

結婚しても仕事を続けて、
夫を支えたい！

60代…

女性が外で働くなんて。
専業主婦でいいじゃない。
家事はどうするの？家庭で
ギャップ

○家庭科共修世代(30代以下)と
40代以上の世代間ギャップ?!

家庭科が男女共修になって20年以上が経ち、最初に平等に家庭科教育を受けた世代は30代後半。結婚、子育て期に入り、家事や育児を協力して日々の生活を送っているご家庭も多いかと思えます。

右の吹き出しのように、職場内、家庭内などの世代間によって「なぜ?」「どうして?」と思うことがあるようです。このような認識の違いも、実は受けていた教育の違いによるものかもしれません。

今は、男性が子どもを連れて買い物に出歩くことも多く見かけるようになりましたし、子どものお迎えのために早く帰る夫もたくさんいます。それを当人は「男なのに無理してやっている」のではなく、「自らやっている、やりたいからやっている」ことが当たり前の社会になってきました。

日々生き方や働き方は変化しています。世代間で多様性を認め、それぞれの家庭でのやり方を否定せずに応援してあげること。それが、今の社会に求められています。

家庭科共修 After 世代

家庭科が中学校で男女共修になった年に中学に入学し、一貫して共修の環境で学びました。通っていた中学・高校では名簿も男女混合、体育も共修でしたので、家庭科が共修であることの違和感はなかったです。制服の違いはありましたが、「女だから」「男だから」という理由で何かを指摘されることはなかったように思います。

男女共生き方が多様化している現代において、結婚や子どもを持つことの有無を問わず、その時々さまざまな状況の中で自分自身の意思を持って生き抜いていく力をつけるために、また他人の生き方に対して理解を持って接するために、家庭科はより一層重要になっているのではないかと感じます。

(伊藤)

家庭科共修 Before 世代

私の中学・高校時代の家庭科は男女別でした。女子は裁縫や調理、男子は本棚や椅子を作っていたのを覚えています。その頃の私は、教育の場で性別により学ぶ機会が限定されることに疑問を持ちませんでした。生徒の名簿が男子・女子の順でも『そういう決まりなんだろう』くらいにしか感じていませんでした。そのような環境に慣れていると、生徒会長・学級委員長は男子で副が女子、という男性を優先するという意識があったように思います。

私たちは結婚・出産を経験する時、仕事を続けることに罪悪感を持ち、夫は仕事で助けを得られず、職場の人たちの理解もなく、仕事を辞めるということを自ら選ぶしかなかった世代です。今はいろいろな制度が整って、育児・介護・病気でも働き続けられる環境になっている…と信じたいです。

(中野渡)

○それぞれの立場から、家庭科を振り返る